パネルディスカッション

「初中等日本語教育スタンダード及び高等教育との連携」

パネリスト（敬称略）：　嶋田和子、片桐準二、中西令子、D.オユンゲレル、D.ボルマー、Ts.デルゲレフツェツェグ
司会進行（敬称略）：　Ts.プレブスレン（モンゴル日本語教師会　副会長）、三本智哉（国際交流基金JF講座日本語専門家）

1.　今日の講演・発表で印象に残ったこと

M:　まず参加者の皆様、本日の2つの基調講演と3つの発表を聞いてそれぞれ印象に残ったことについて、近くにいる人と3～5分で話してください。

（参加者同士で話し合い）

M:　まずプレブスレン先生、5つの発表をお聴きになっていかがでしたか。

P:　では、まず日本語教師として述べたいと思います。

日本語教育シンポジウムは毎年私達にとって貴重な勉強の機会になっています。本日最も印象に残ったのは、嶋田先生も強調されていた「連携」です。「連携」とはどのようなものか、嶋田先生が実用的にわかりやすく話してくださいました。

次に、片桐先生の調査によると、『できるモン』ができたことによって、多くの良い変化がもたらされました。このようなすばらしい教科書ができたのも、やはり連携の結果だと思いました。

そして、初中等グループ、高等教育グループの発表によって、そこでも今、連携が話題になっていることがわかりました。教育大学では、教師養成のための教育実習において『できるモン』を使ってみてその反省等を調査しており、それはすばらしいことです。またMUISでの教材作成の試みは、初中等教育の教科書を参考にして始まったという点が特に印象的でした。したがいまして、今日は最初から最後まで「連携」がキーワードで、とても幅広い「連携」を感じ取ることができました。非常に嬉しく思います。

M:　ありがとうございます。では嶋田先生、いかがでしたか。

S:　3年半ぶりにモンゴルへ参りまして、このように『できるモン』が広がっているのはすばらしいと思いました。ただし、その後どこまで深く勉強が続いているのか、続くのかが課題ですね。そこで私が考えたことをお話します。

中西さんから『できるモン』が目指したことと保護者や担任からのニーズとの間にギャップがあるという話がありました。でも、それはもしかしたら、その保護者に向けて、スタンダードやCan-doの提示

が足りなかったのかもしれません。作って使っている側はどうしても「他の人もわかっている」と思ってしまいますが、もっとほかの人々との距離を縮めてしっかり提示していかなければなりません。

また、Can-doばかりに目が行きがちですが、それは全体の中の一つにすぎません。たとえばCEFRでは、人と社会のつながりを大事にするという理念があります。モンゴルでも全体の理念をもっと明確化し、相手にどのように見えるかということを工夫していったほうがいいでしょう。そのためには、やはり周りを巻き込むことです。「相手がわかってくれない」で終わるのではなく、「なぜわからないのだろう」と相手に働きかけていくと、少し変わっていくのではと思います

M：ありがとうございます。では続きまして、片桐先生、お願いします。

K：『できるモン』を作っているときから今に至るまで、モンゴル日本語教育スタンダードというものはまとまっていません。説明するものがいまだにないのです。ですので、その内容をまとめ、さらなる普及に活用すると同時に、それをもとに保護者の方々にも伝えていくといいのではと思います。

また、教育大学でも教育実習で『できるモン』を使い始めているということは、タテの連携が始まりつつあるということです。私も3年半ぶりにモンゴルに来て、それが大きな発見でした。引き続き進めていってほしいと思います。

M：ありがとうございました。では、初中等教育グループはいかがでしょうか。

N：「連携」について考えてみて、まずは自分の職場で連携が足りていなかったと深く反省しました。連携をするためには何が必要か。それを私の今日の課題として持ち帰りたいと思います。

また、初中等教育の先生方と一緒に実施している「漢字ナーダム」も、連携して今後さらに広めていきたいと思うので、よろしくお願いします。

O：今日のシンポジウムのキーワードは「連携」でした。なぜ勉強会が続かないのか、なぜ途中で人数が減っていくのかということをずっと考えていましたが、それを解決するヒントの一つは「対話」だったと気づきました。私達には対話が全く足りていません。今後連携を広めていくには対話が必要です。

B：先生方の発表を聞き、皆同じ課題を持っているということがわかったので、これらの課題をどうしていけばいいかということを今後協力して考えていくこともできるのだと思いました。

そして嶋田先生は、私達の勉強のために、日本での新しい動きを紹介し、わざわざ日本から資料を持ってきてくださいました。特にZoom会議は大変興味深く、今後授業にも取り入れられるのではないかと思いました。また片桐先生には、いつも研究の仕方を教えていただいています。今日も勉強になりました。ありがとうございました。

D：全ての先生方のお話に勉強できるものが多くありました。特に嶋田先生がおっしゃった日本語教師の対話能力、学習者を理解しようとする努力、学習者の心に火をつける力などのお話について、そうやって悩み、常に努力していくことが一番大事だと思いました。同じやり方をずっと繰り返していると、自分でもつまらないと感じますし、一方で自分がそれに気が付かないと知らない間にどんどん落ちていってしまいます。先生を見て、まだまだ自分も勉強不足で、新しいことに挑戦するのを面倒と思って怠けてしまうことが多いと反省しました。

先生方の発表にあったタテとヨコの連携の問題は私自身の職場にもあります。私の職場には問題が山積していますが、それを解決するためには、人間と人間、授業と授業など、全ての連携を大切にしなければなりません。

また、現在、開発中の教材の評価について、いずれ片桐先生にフォローアップ調査していただければ嬉しいです。

2.　初中等教育と高等教育の連携のために

M：どの先生方もやはり最初にプレブスレン先生がおっしゃったような「連携」をポイントに挙げています。会場の皆様もそうだったことと思います。

「連携」のためには対話が必要で、対話のためには一つの目標があるといいのですが、その一つのキーワードとして「スタンダード」があります。初中等教育側から高等教育側に対して、スタンダードに関しての質問や、このようにしたらつながれるのではという意見がありますか。

O：2009年日本語教育研究会が始まったばかりのころ、私は大学で教えていました。新入生には既修者とゼロスタートの学生がいたので、既修者のできる部分を生かすためにその2グループを分けたほうがいいと意識がありました。そこで、その学生が初中等でどの程度学習してきたのかを証明するために、初中等教育での日本語能力評価表を当時の先生方と作成していました。その頃から、初中等でどのくらいできているのか大学側に気付いてほしいと考えていたのです。

今は『できるモン』のCan-doやポートフォリオを利用し、それを大学に持っていけばその学習者がどの程度できるのかがわかる、という形になるのが希望です。それが今後できれば連携ができていくのではないでしょうか。

B：教育大学は、基礎科目や教職科目は一からスタートしますが、日本語に関してはJLPTの合格証明書があれば能力を認めるという制度ができました。

D：モンゴル国立大学もJLPTの結果をメインに考え、それがあれば日本語授業の単位や一定期間の出席免除を認めることがありますが、それはあくまで教師個人によるもので、大学としての規則や決まった対応は現状ありません。学費を払ってきちんと履修し、単位を取るというのが大学の方針です。

JLPTとJFスタンダードをどう連携させるかが今の一番の問題です。およそこのレベルに該当するというのはわかりますが、両者がぴったり当てはまるわけではないので、例えばポートフォリオを見ただけで対応を決めるのは今は難しいです。

M：ありがとうございます。『できるモン』でやってきたことを大学に伝えることで、課題はありながらも徐々にタテの連携が進むのではと思います。

3.　『できるモン』を育てるために

M：『できるモン』は、今まだ3歳です。嶋田先生のご講演に「教材を育てる」という言葉がありましたが、どうすれば今後『できるモン』が育っていくと思いますか。

N：『できるモン』は身近なトピックを扱ってはいますが、生徒全員に100％状況が当てはまるということはありません。例えば、レベル3（下）に「日本旅行」というトピックがあります。モンゲニ学校では10年生で使っていますが、クラスの半分が日本に行ったことがあり、半分はありません。行ったことがある生徒にはとても身近でおもしろいですが、行ったことがない生徒は取り残されている感があります。そのような部分を解決すれば前進するのではと思います。

O：　作成側から使う側に回ったので気が付いたことかもしれませんが、『できるモン』は出来上がったものをそのまま使うものではなく、それを土台にして自分の生徒に合わせていくものです。自分の学校や生徒、教科書に向き合い、気づいたことを書き込んだりし、次に他の教師と会ったときにそれらを共有して問題解決を図っていくことが、育てていくための一つの手段だと分かりました。

M：　『できるモン』の内容の改善と、「発信」に関することですね。「発信」に関して、もう少し言いたいこと、『できるモン』を使っている人たちに呼びかけたいことはありますか。

O：　勉強会の場をもう少し広げたいです。今まで協力してきてくださった先生方に引き続き頑張ってほしいですし、地方など他の新しい先生方にも関わってほしいです。Zoom会議を使ってオンラインでつながってはどうでしょうか。時間の短縮にもなり、活動の幅も広げられると思います。お知らせを送ったとき、ぜひつながっていただきたいです。

M：　現在、様々なICTが発達してきたことによってできることが増えてきました。では、そのようにして集まって、何を作ったらいいでしょうか。どんな成果物があれば学習者が喜ぶでしょうか。会場の皆様も何かアイディアがありませんか。

　I（モンゲニ大学　山田先生）：今、会場の前3列には誰も座っていません。このような姿勢で連携ができるとは思えません。休憩時間には、モンゴル人の先生方はにこやかに話してくれますが、日本人からは見下されて、連携どころではありません。

　また、オユンゲレル先生、ボルマー先生のお話はよくわかりましたが、日本人の説明は全くわかりませんでした。反省していただきたいです。

M：　厳しいご意見をありがとうございます。確かに前の方は空席になっていますが、ほかの皆様はお忙しい中で来ていただき、その情熱がこの会場にあふれていると思います。

E：　前の方は来賓の方々の席でした。来場者の方々は日本語がわかる方ばかりではないので、午前中の挨拶と基調講演を聞き、お帰りになりました。また、発表者の席でもあり、今はパネリストとして壇上に上がっています。

M：　では皆様、『できるモン』の成果物について、いかがでしょうか。

K：　プロジェクトに一緒に取り組んだ先生方も今日少しは来ていらっしゃいますが、実はそれほど多くはなく、会場の方々の大部分は参加していなかった先生方です。それでも最後まで残って『できるモン』の話を聞いてくださり、本当に嬉しく思います。このような方々にも情報が回るように『できるモン』を育てていってください。

　インドネシアの例ですが、WhatsAppという日本のLINEのようなSNSがあり、どの先生もそれを常に見ていて、そこに情報を送るとすぐに反応があります。教師の情報やアンケートもそこに載せればすぐに返事があります。そのようなものがモンゴルでもできて、会場にいらっしゃる方々もメンバーに入っていただき、実践の悩みや問題などを気軽に投稿できるといいと思います。

B：　『できるモン』を使っている学校と使っていない学校がありますが、皆スタンダードの考え方をもう少し勉強すれば、成果物まで持っていけるのではないでしょうか。スタンダードを勉強すれば、今使っている教材にも取り入れていくことができますし、その成果物の評価の仕方も見えてきます。そうすればモンゴルの日本語教育はますます発展していくと思います。

4.　まとめ

M：　会場には初中等や大学以外の先生方もいらっしゃいます。本日の内容で、ご自身の機関にも関わりがあることや役に立ちそうなことがありましたか。

I（名古屋大学日本法教育研究センター　八尾先生）：私は日本センターでも一般の方々を対象に『まるごと』を使って日本語教育をしています。5年程、『まるごと』を使ってきて、（センターでのコースは）A1～B1後半レベルまできました。その中で様々な問題を解決してきた経験があるので、『できるモン』チームや高等教育機関と連携してそれぞれの問題を話し合える場があれば、日本センターでの話も紹介できると思います。

I（新モンゴル学校　バーサンスレン先生）：今日は貴重なお話を聞けて勉強になり、とても感謝しています。私の学校では高校3年生までのN2、N3を目指して『みんなの日本語』を中心にしているので、『できるモン』をそのまま使うのは少し無理があります。しかし、『できるモン』からも使えるところを使っています。今日様々な現実も知ることができたので、今後、他の学校の先生方ともっと協力して、使えるところを増やしていこうと思います。

実は私は古いタイプの教師で、文法を最初にぎっしり教え練習させるというスタイルでしたが、嶋田先生と片桐先生の話を聞いて、教え方を少し変えてみようかと思えました。ありがとうございます。

S：どの教科書を使っていても、ご自分の考え方次第です。私も以前は『みんなの日本語』を使っていましたが、（やり方自体は、今の）『できる日本語』のやり方でやっていました。ただ、『みんなの日本語』は骨組みしかないので、準備はとても大変でした。それをどうやったら楽になるかと考えて作ったのが『できる日本語』です。『できる日本語』の特徴は、Can-doがあることではなく、初級から、人や社会とつながる日本語、つまり対話力を身につけることを目指していることです。『できる日本語』では文法がきちんと身に付かないのではと思う人がいるなら、それは教師が文法をきちんと押さえておらず、「楽しい」で終わってしまっているからです。教材の特徴をしっかり押さえましょう。様々な教材を分析しながら、新しいものへの好奇心と創造力を持ってやっていくと、日本語教育はおもしろいです。

モンゴルでは『できるモン』に関して、しっかり皆さんで対話してください。必ず前にやっていたやり方が生きてきます。前に何か使っていて思うことがあったから、『できるモン』ができたはずですから。

私は世界の様々なところに行っていますが、こんなにタテの連携ができている国はほとんどありません。すばらしいと思います。でも、今は少し途切れかけているところがあるようです。それをこの教師会20周年をきっかけにまた深めていってください。

M：モンゴルでは「心に火が付く」ではなく「目に火が付く」というそうです。先ほどは下を向いていた会場の皆様も、今は目がキラキラしています。このパネルディスカッションが皆様の心や目に火を付けたようであれば幸いです。ありがとうございました。